神田孝平（かんだ たかひら）

幕末から明治にかけて、わが国の近代国家建設を提唱した洋学者。竹中家家臣に生まれ、漢学を学んでいたが、嘉永6年（1853）のペリーの来航に刺激をうけて洋学を学んだ。長崎留学中には福沢諭吉とも親しくなり、ともにオランダ語の習得に励んだ。

文久2年（1862）幕府の洋学の研究機関である蕃書調所の教授となり、数学などを教えた。

慶応4年（1868）に幕府が倒れると、新政府に召されて上京し、公儀所副議長などを歴任し、明治4年（1871）兵庫県令となり、庶民に寄り添った施策を行い、地方自治の近代化に貢献、明治23年（1890）貴族院議員に選出される。

孝平の業績としては『田税新法』を著し、地租改正の原案を作成したことが著名だが、法律、経済、天文学、考古学など幅広い分野での近代化に果たした功績は多大である。また、高官となってからも、郷里である岩手を大切にし、明治維新で苦難にあえぐ地元の子弟の世話をしたり、小学校開設のために多額の援助を行ったりした。

長原孝太郎（ながはら こうたろう）

明治から昭和にかけて洋画団体の白馬会に所属し、活躍した画家。代表作に「明星」「入道雲」などがある。東京美術学校で30年以上の長きにわたり、後進の指導をし、萬鉄五郎・熊谷守一など、多くの洋画家を世に送り出した。

また、坪内逍遥、森鴎外・島崎藤村らの本の装丁や挿絵を担当し、近代の文壇にも大きな影響を与えた。『めざまし草』『明星』『とぱるぞ』などに風刺漫画を掲載したことでも知られる。